平成27年度 前橋・高崎連携事業文化財展

# 東国千年の都
# 出土した動物たち

## ―人がおそれ愛したケモノの世界―

### 前橋・高崎連携事業文化財展の開催にあたって

今年度で9回目を迎える前橋・高崎連携事業文化財展は、これまで様々なテーマのもと、両市の埋蔵文化財を取り上げてきました。今回は「動物」がテーマです。

私たち人間は、はるか昔から「動物」と関わってきました。生きるための食べ物として、あるいは信頼できるパートナーとして、ときにはおそれるものとして、さまざまな場面で動物とともに暮らしてきたといえるでしょう。

前橋・高崎両市域では、狩猟の対象であったイノシシやシカ、イヌやウマ、トリや昆虫だけでなく、鳳凰や龍など空想上の動物も含めた、さまざまな動物たちに関する遺物・遺構が多数発見されており、古くから多様な動物とかかわりのあったことがわかります。

今回は、そのような人と動物との関わりがわかる資料をそろえ、「狩る」、「まつる」、「ともに生きる」というテーマに分けて展示します。両市の先人たちが築いてきた、人と動物との「絆」を感じていただき本展示が、改めて周りの動物たちに目を向けるきっかけとなりましたら幸いです。

前橋市長 山本 龍

高崎市長 富岡 賢治

主催：前橋市・前橋市教育委員会、高崎市・高崎市教育委員会
後援：上毛新聞社、朝日新聞前橋総局、毎日新聞前橋支局、読売新聞前橋支局、産経新聞前橋支局、東京新聞前橋支局、共同通信社前橋支局、時事通信社前橋支局、ＮＨＫ前橋放送局、群馬テレビ㈱、株式会社エフエム群馬、㈱ラジオ高崎、まえばしCITYエフエム（順不同）

# 第1章　狩る

## 1　捕らえる　－旧石器時代－

旧石器時代には、ナウマンゾウ・ヤギュウ・オオツノジカなどの大型獣が多数生息し、主な狩りの対象であった。大型獣は、1頭捕まえることで大量の肉が手に入るほか、道具の材料となる骨や角、さらには毛皮も手に入り、当時の人々にとっては大変重要な「資源」であった。

狩りの道具は、鋭い刃を持つナイフ形石器・尖頭器・細石刃などの石器を、槍の先に着けたものを使用していたと考えられている。

細石刃石器群（頭無遺跡　第Ⅰ文化層）

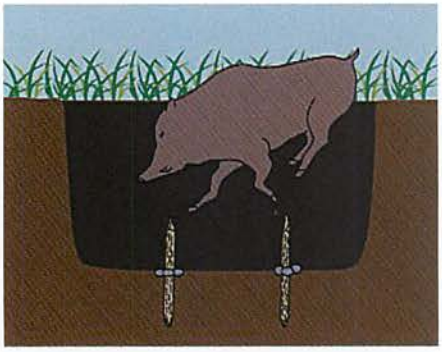
細石刃の槍をもつ旧石器時代の狩人
模型制作・撮影 藤森英二

## 2　捕らえる　－縄文時代以降－

縄文時代に入ると、新たに弓矢が発明された。矢の先端には石鏃と呼ばれる矢じりを装着し、動きのすばやい中、小型獣を捕らえていたと考えられる。また、陥穴をしかけたり、イヌをパートナーにした狩猟も行われるようになった。弥生時代にも山間部などで狩猟は続いていたようである。狩猟と並び重要な生業だった漁撈には、動物の骨や牙を加工した釣針、網漁などに使われた土錘、石錘などのおもりが使われた。

古墳時代では、保渡田Ⅶ遺跡（高崎市）から出土した埴輪に、イノシシ狩りの場面を再現できるものがあり、狩猟が行われていたことを示唆している。

縄文時代の狩りの風景（想像図）　イラスト　角田祥子



陥穴再現イラスト

陥穴の例（前橋市栗原東遺跡）

埴輪による狩猟場面の再現（保渡田Ⅶ遺跡）

## 3　解体する・食べる　－旧石器時代－

旧石器時代の遺跡からは、獣骨や肉を切ったり削ったりするために使用された石器が出土する。刃の先端部分を磨いた「局部磨製石斧」と呼ばれる石斧は、動物の解体に使用したとも考えられている。ナイフ形石器・尖頭器についても、槍先の他に肉を切る道具としても使用されたと考えられている。このほかに動物の解体に使ったと見られる掻器や削器、骨などの加工具とみられる彫器などが存在する。

旧石器時代の人々は土器を使っていないが、遺跡からは、熱によって焼けた握りこぶし大の石が集中して出土する「礫群」とよばれるものが見つかることがある。これは、石蒸し料理を行った痕跡ではないかと考えられている。

ナイフ形石器（折茂Ⅲ遺跡）

ナイフ形石器（折茂Ⅲ遺跡）

## 4　解体する・食べる　－縄文時代以降－

縄文時代、狩った動物の解体に石器は欠かせなかった。川白田遺跡（前橋市）や安通・洞遺跡（前橋市）では、肉を切るための石匙や、穴を開けるための石錐が出土している。

弥生時代以降は食べるための家畜を飼育するようになったが、狩りも盛んにおこなわれていた。新保遺跡・新保田中村前遺跡（高崎市）では、イヌとともに多数のシカ・イノシシの骨が出土している。古墳時代の三ッ寺Ⅰ遺跡（高崎市）でも、解体痕を残すシカ・イノシシの骨が出土している。

古代に入ると仏教の影響により、肉食や動物の殺生が禁止されたといわれるが、地方の庶民の間では狩猟は制限されず、奈良時代まで肉食は続いたとみられる。

解体痕のある骨（三ッ寺Ⅰ遺跡）

## トピックス①　神へ捧げられた動物たち

柳久保遺跡（前橋市）の水田跡では、水田の水口の近くで騎馬の人物像などが描かれた墨画土器、その周囲には5枚重ねで置かれた土器、ブタの前脚の骨（橈骨）、ウマの上あご臼歯などが出土し、その北側では文字が記された墨書土器や漆器椀などの特殊な遺物が出土した。

平安時代前期（9世紀）に斎部広成が著した歴史書『古語拾遺』には、御歳神の祟りによってイナゴが大発生し、稲の苗を枯らしてしまったため、白猪、白馬、白鶏を生贄にし、胡桃の葉やジュズ玉、塩などを供え、溝の口に牛宍（肉）と男茎形を置いたところ、苗がまた茂って豊作となった様子が描かれている。柳久保遺跡で出土した遺物の出土状況は、『古語拾遺』に描かれた祭祀の様子と非常によく似ており、豊作を祈願した祭祀跡と考えられる。

墨画土器は、土器の内・外面に異様な風貌をした様々な人物が墨で描かれている。

災いをもたらす鬼神たちが群行する様子を描いたと考えられている。また、これらの鬼神たちは馬に乗った姿で描かれているが、疫病などの流行の早さを騎馬の速度に重ねて表現したと考えられる。

墨書土器展開図（柳久保水田址）

特殊遺物（柳久保水田址）

# 第2章　まつる

## 1　描く・かたどる

縄文時代前期には、主たる狩猟対象であるイノシシを土器の口縁部にかたどった「獣面把手」がある。神保植松遺跡（高崎市）出土の獣面把手はその代表的な資料である。

古墳時代では、ウマをかたどった石製模造品がある。長根羽田倉遺跡（高崎市）の祭祀遺構では、滑石という軟質で加工しやすい石材でウマをかたどった製品が多数出土している。この時代、ウマは権威の象徴として所有者の威信を示すものであったため、模造品が作られ、祀られたものと考えられる。また、剣崎長瀞西遺跡（高崎市）3号古墳では、シカの絵を線刻した円筒埴輪が出土している。

獣面把手（神保植松遺跡）

## 2　祈る　－動物遺存体－

新保遺跡（高崎市）の弥生時代後期の大溝からは、シカの下顎に穴をあけたものが出土し、生命力を用いた農耕儀礼が行われたものとみられる。豪族居館である三ツ寺Ⅰ遺跡（高崎市）では、濠の中からシカ・イノシシの骨が土器や滑石製模造品・木製品などと共に出土しており、祭祀行為に用いられた可能性が高い。ウマやウシの骨は、水に関わる場所での発見例が多く、雨乞いあるいは五穀豊穣を祈願する殺馬・殺牛祭祀の可能性も考えられている。

剣崎長瀞西遺跡（高崎市）では、鉄製轡を装着したままの状態でウマの顎骨が出土している。

5世紀後半の時期のものとみられ、隣接する古墳に埋葬された人に対する殉葬と考えられている。

馬具出土状況（剣崎長瀞西遺跡）

## 3　祈る　－（埴輪）－

馬形埴輪のほとんどは、きらびやかな飾りを数多く装着した「飾り馬」をかたどっている。背には鞍が乗せられ、轡や手綱が装着されている飾り馬は権威の象徴であり、乗ることができたのは一握りの人物だけだったろう。

古墳に並べられた人物埴輪や動物埴輪によって、ある特定の場面が表現されることもある。保渡田Ⅶ遺跡（高崎市）では、人物（狩人）の腰に現実よりも小さなイノシシが着けられた埴輪と猟犬の埴輪、さらに矢の刺さったイノシシの埴輪が揃って出土しており、儀礼的なイノシシ狩りの様子を示すと考えられている。

馬形埴輪（白藤古墳群V-4号古墳）

馬形埴輪（安坪Ⅲ遺跡12号墳）

馬形埴輪（中原Ⅱ遺跡Ⅰ号墳）

## 4 祈る －（土製品・宝器など）－

小像付筒形器台
（前二子古墳）

小像付筒形器台展開写真（前二子古墳）

土製小像付円筒埴輪
（後二子古墳）

環頭大刀柄頭
（安坪Ⅳ遺跡12号墳）

動物を模した出土品はほかにもある。後二子古墳（前橋市）では、親子サルとそれを下から追うイヌの小像がついた円筒埴輪が出土している。前二子古墳（前橋市）では、横穴式石室から「須恵器装飾筒形器台」が出土しており、縁にはカエルを追うヘビ、トリ、カメの小像が付けられている。

古墳の副葬品の宝器（鏡・大刀など）にも動物の図柄が見られる。前橋天神山古墳出土の「三角縁神獣鏡」には、神と獣の図像が描かれている。大胡町39号墳（前橋市）出土の「獅噛環刀大刀」には獅子、安坪Ⅳ遺跡12号墳（高崎市）出土の「単鳳環頭大刀」には鳳凰のモチーフがある。これらは空想上の動物で、所有者の権威を示している。

## 5 祈る －（古代）－

山王廃寺跡（前橋市）から出土した大量の塑像片の中には、中国的な仏教造形要素を持つイノシシの頭部とラクダの前足付け根部分が見つかった。山王廃寺を造営した氏族の先進性と強大な政治経済力がうかがい知れる。

平安時代では、山間地の集落遺跡である水沼寺沢遺跡（高崎市）14号住居から、鳳凰らしき図像が描かれた八稜鏡が出土している。

中世では、箕輪城主長野氏関連の寺院跡とされる和田山天神前遺跡（高崎市）出土の水瓶は、奈良県の信貴山朝護孫子寺に伝わる高級品と酷似し、蓋の摘みにつけられた獅子は、所有者の権威を今に伝える。

動物塑像（山王廃寺跡）

蓬莱双雀鏡
（和田山天神前遺跡）

## トピックス② 占いに使われた「卜骨」

卜骨とは、獣骨に火のついた棒の先端を押し当て、その割れ目や変色の仕方によって物事の吉凶を占う儀礼（卜占）に使用した獣骨のことである。弥生時代に稲作や青銅器と共に大陸から伝わったと考えられる。骨面には、円形の小さな灼痕が点々と付き、「点状焼灼法」という方法で占っていたことがわかる。

新保田中村前遺跡（高崎市）では、弥生時代後期の河川跡から、ニホンジカやイノシシの肩甲骨が出土している。骨面には、擦痕や点状の焼灼痕が残っている。『魏志倭人伝』によると、卜占によって戦闘、収穫、行事など、ムラの生活に直結する事柄について神の意思を問い、ムラの進む道を決定したものと考えられる。

なお卜占は、現代においても富岡市貫前神社などで、鹿占神事として受け継がれている。

卜骨（新保田中村前遺跡）

# 第3章　ともに生きる

## 1　ともに働く　－古墳時代－

古墳時代6世紀の水田跡(榛名山二ツ岳火山灰(Hr.-FA):6世紀初頭に埋没した小区画水田跡)からウマのひづめ跡が発見されることがある。浜川芦田貝戸遺跡(高崎市)では、前、後の区別が明瞭につく保存状態の良好な馬のひづめ跡を検出した。

50m以上連続して歩いているウマのひづめ跡を追跡すると、その時水田として機能していなかったとみられる場所でのみ発見されることがわかった。具体的には、①畦が低くつぶれた部分(休耕地)、②凹凸の激しい部分(田起こし中)、③縦畦のみが作られた部分(作りかけ)である。一方で縦畦・横畦が高くしっかりと作られ完成した水田面では、歩行を示す痕跡は見つからない。

このことから、6世紀当時のウマは水田を耕すためではなく、農作業の荷物運搬などに使役されたと考えられるのである。

ウマを使役するイメージ(かみつけの里博物館)

馬蹄跡(浜川芦田貝戸遺跡)

馬蹄跡(浜川芦田貝戸遺跡)

馬蹄跡(浜川芦田貝戸遺跡)

## 2　ともに働く　－古代以降－

古代になると、東山道駅路の各駅家にウマが備えられ、中央と地方の情報伝達をおこなっていたことや中央へ貢ぐウマを確保するため、古代の上野国には官営の牧が9つ設けられていたことが知られている。

また、浅間B軽石(As-B:1108年降灰)が降り積もった水田面からは、人間だけでなく動物の足跡も発見されており、中屋敷Ⅱ遺跡(高崎市)・日高遺跡(高崎市)などでウシのひづめ跡を確認している。

なお、律令を集成した法典『延喜式』には、東国から乳製品の一種である「蘇」が貢納されていたことが記載されている。古代を生きた人々にとってウシはウマと同じように身近な存在であったようである。

牛蹄跡(中屋敷Ⅱ遺跡)

## 3　飾る　－弥生時代－

新保田中村前遺跡(高崎市)では、動物の歯牙や骨角を利用した、頭飾りの簪、胸元を飾る垂飾り、弓を飾る弭形製品などの「装身具」が出土している。

簪はシカの角製で、特定の地位や階層を示す装身具であったと考えられる。

垂飾りは、絶滅したとされるニホンオオカミの牙製で、犬歯に穿孔がみられる。ニホンオオカミ製の垂飾りは、猛獣を倒した狩猟者の勇気を示すものとして大きなステータスになったと考えられる。

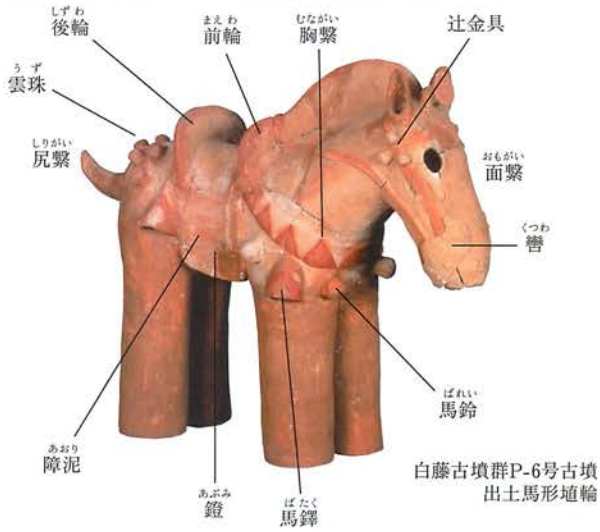
弓を飾る道具、弭形製品はシカの角製で、組み合わせ式の複雑な構造をしている。儀式や祭祀のときに、弓を装飾していたと考えられる。

V字形簪(左)、双脚簪(右)(新保田中村前遺跡)

## 4 飾る －古墳時代－

古墳時代中期後半になると、実用的な馬具から装飾性の高い飾り馬具が多く出土するようになる。顔を飾る轡、胸を飾る馬鐸、尻を飾る杏葉など、実にきらびやかな秀逸品で馬体が飾られた。このような飾りを着けた馬に乗ることが出来たのは、限られた人物＝王だけだったと考えられる。

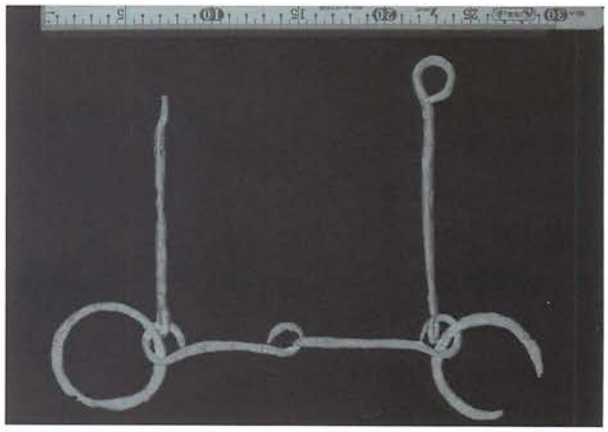
白藤古墳群P-6号墳（前橋市）から出土した馬形埴輪は、顔にf字形鏡板付轡を付け、胸繋には馬鐸と馬鈴を装着し、その他鞍や障泥、輪鐙など、馬具一式を備えている。馬形埴輪によって、飾り馬具の装着位置や方法を知ることができる。



白藤古墳群P-6号古墳出土馬形埴輪

剣菱形杏葉（前二子古墳）

菱形辻金具（中原Ⅱ遺跡1号墳）


鏡板付轡（安坪Ⅳ遺跡14号墳）

## 5 飾る －古代以降－

古代中国では、波を噴き出して雨を降らせる海中の魚「鴟尾」が、建物を火災から守る力を持つ棟飾りとして普及した。その形状は、大棟を水面に見立て、尾を水面上に出した姿を表しており、朝鮮半島から仏教文化とともに日本に伝えられた。

山王廃寺跡（前橋市）からは、2体の石製「鴟尾」があり、石材や形状が異なることから、それぞれ異なる建物に据えられていた可能性が指摘されている。また、瓦製の鴟尾も出土している。

近世には、城郭建築において、鯱瓦が防火の守り神として棟飾りに用いられた。前橋城や高崎城で使われたものが見つかっている。

鴟尾（山王廃寺）

鯱瓦（高崎城三ノ丸遺跡）

## 6 愛でる －近世－

江戸時代の高崎城三ノ丸遺跡からは、サギの描かれた大皿が出土しているほか、前橋城遺跡・前橋城三ノ丸遺跡・前橋城南曲輪からも、ツル・シカ・コイ・コウモリなどの動物をはじめ、空想上の動物である麒麟・獅子などが描かれた陶磁器が出土している。また、火鉢の把手に獅子、急須・土瓶の蓋のつまみにカエルのモチーフなども用いられた。

この時代、動物を飼育することが広く庶民にも普及し、「泥人形」や「泥面子」などの玩具にも、狛犬・イヌ・ネコ・サル・ウマなどのモチーフが取り入れられた。

人々は、「愛でる」対象として、動物たちと新たな関係を築くこととなったのである。

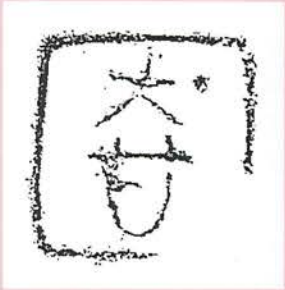
前橋城出土遺物

## トピックス③　文字にあらわれた動物たち

漆窪上漆窪B遺跡（前橋市）からは「馬長」と刻字された土器が、上高原遺跡（高崎市）からも「馬」と刻字された秤のおもり石が出土している。いずれも平安時代の資料で、集落内で馬を管理する職掌があったことを示している。

下芝五反田遺跡では、平安時代の水田耕作土中から「犬甘」の印文をもつ銅印が出土している。「犬甘」は、古代氏族である「犬養（飼）」の名を示すと考えられている。

上野三碑である山上碑、多胡碑、金井沢碑の碑文の中にも動物を表す文字が記されている。



犬甘の印（下芝五反田遺跡）

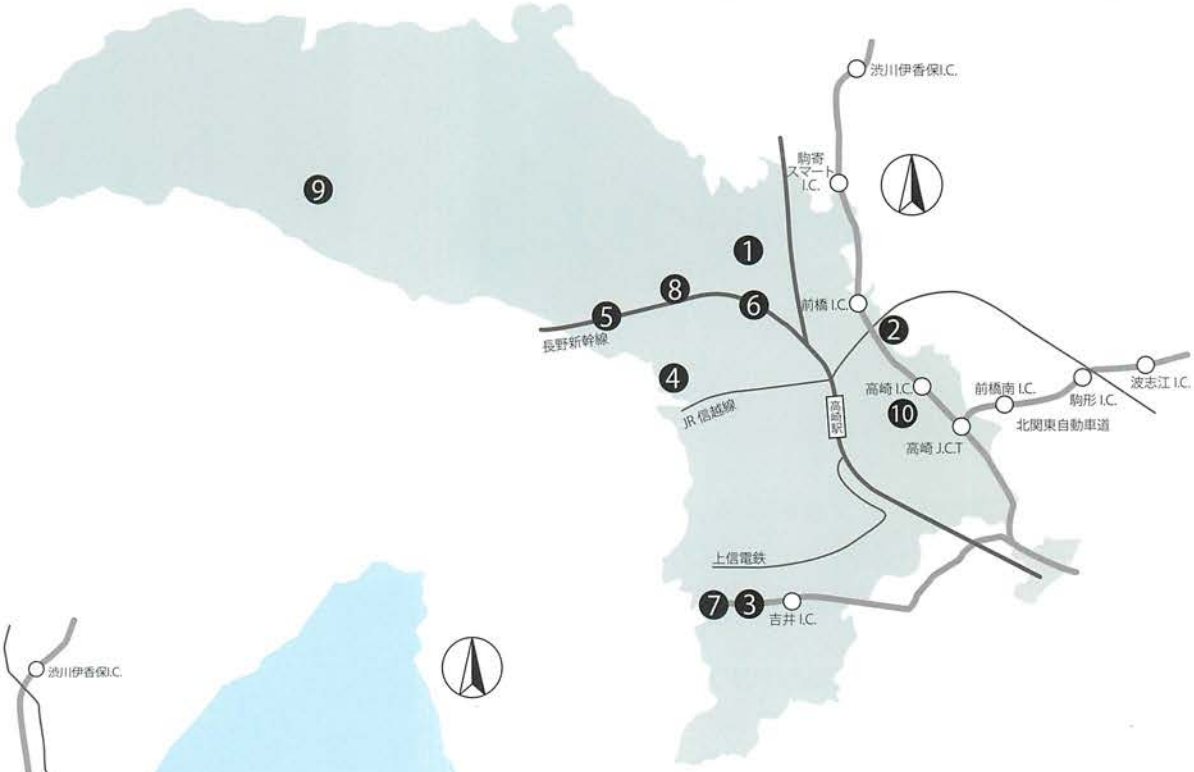
多胡碑碑文

山上碑には「辛己歳」、多胡碑には「甲寅」「給羊」、金井沢碑には「丙寅」と、それぞれ「寅」「羊」「巳」「亀」といった文字がみえる。古代の年号は、十干十二支による干支が使用されていたため十二支動物が記されている。また多胡碑の「羊」については、人物の名を示したとする人名説が有力であるが、十二支動物で方位「未」を示したとする方角説などもある。

## 〈 主な展示品の出土遺跡 〉

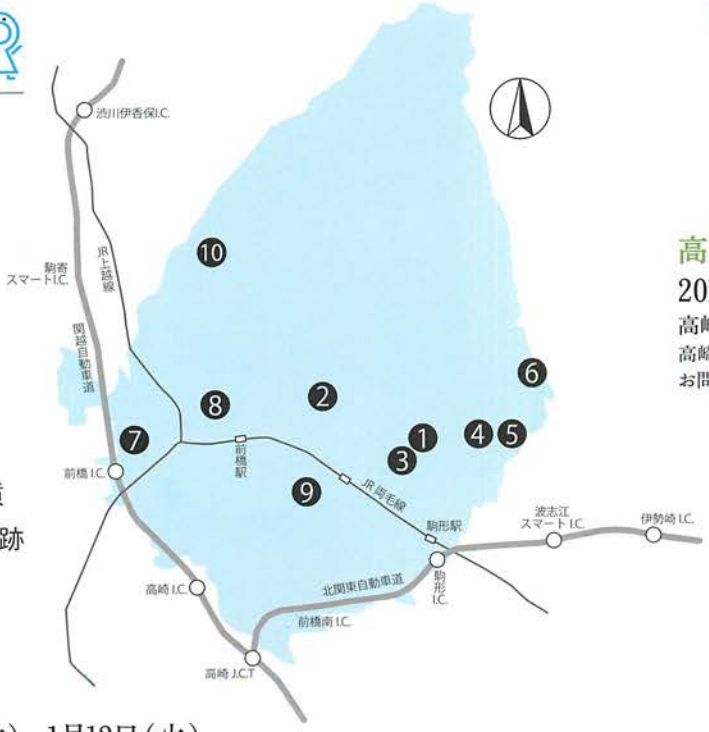
### 高崎市

❶保渡田Ⅶ遺跡
❷新保田中村前遺跡
❸神保植松遺跡
❹剣崎長瀞西遺跡
❺中里見原遺跡
❻浜川芦田貝戸遺跡
❼中原Ⅱ遺跡
❽和田山天神前遺跡
❾水沼寺沢遺跡
❿高崎情報団地遺跡




### 前橋市

❶頭無遺跡
❷川白田遺跡
❸柳久保遺跡
❹前二子古墳
❺後二子古墳
❻白藤古墳群
❼山王廃寺跡
❽前橋城
❾前橋天神山古墳
❿漆窪上漆窪B遺跡




### 高崎会場

2016年1月16日（土）－1月25日（月）
高崎シティギャラリー2階　第6展示室　9時～18時
高崎市高松町35-1
お問い合わせ先　高崎市教育委員会事務局文化財保護課
〒370-8501高崎市高松町35-1　Tel：027-321-1292

### 前橋会場

2016年1月7日（木）－1月12日（火）
前橋プラザ元気21　1階 にぎわいホール　9時～18時
前橋市本町二丁目12-1
お問い合わせ先　前橋市教育委員会事務局文化財保護課　〒371-0853前橋市総社町3-11-4　Tel：027-280-6511